曹洞禅ジャーナル

法眼

第11号　2002年12月

ご挨拶

曹　洞　宗　宗　務　庁
教化部長　宮川敬学

こちら東京では、秋晴れの清々しい日が続いておりますが、海外で活動されておりますみなさまは、いかがお過ごしでしょうか。

私はこのたび教化部長に着任いたしました宮川敬學と申します。これからますます重要になっていく国際布教の担当部長を拝命し、気持ちの引き締まる思いでございます。各位にはよろしくお願い申し上げます。

さて、６月の第８８回通常宗議会におきまして、海外で活動される多くの皆様に直接関係する規程について変更がございましたのでお知らせいたします。このたびの変更は、単なる名称の変更にとどまらず、これまでの宗門の海外開教のあり方を見直し、今世紀のみならず、恒久的な視点に立った施策に資するためのものであります。みなさまにはなにとぞよろしくご理解、ご協力のほどお願いいたします。

１，曹洞宗の海外での布教活動開始以来、１００年の足跡を点検し、現在の多様化した世界情勢に対応させ、さらに布教教化活動を積極的に展開していくため、「開教」の用語を「国際布教」に改めました。この変更に伴い「開教師」が「国際布教師」、「開教総監部」が「国際布教総監部」、「開教総監」が「国際布教総監」と名称変更されました。

２，曹洞宗の海外における布教活動の拡充に資するため、これまで北アメリカ開教総監部に設置されていた北アメリカ開教センターを発展的に解消させ、「曹洞宗国際センター」として新たに設置することになりました。これにより、曹洞宗宗務庁の直轄となり、各国際布教総監部とのより円滑な業務提携をはかってまいります。曹洞宗国際センターの役職員は、本宗の国際布教師及び曹洞宗宗務庁役職員の内から任命され、現在は奥村正博師が所長、横山泰賢師が主事、南原一貴師が書記として業務にあたっております。

以上の詳細につきましては、各国際布教総監部よりお知らせがあるかと存じます。重ねてみなさまのご理解とご協力をお願いいたします。

合掌

高祖道元禅師750回大遠忌円成

秋葉玄吾
北アメリカ国際布教総監

この9月29日、大本山永平寺において、尊くも百弐歳になられた宮崎奕保禅師様御親修により、高祖道元禅師750回大遠忌御正当法要が恙なく厳修されました。

長年にわたり諸準備を進められた50年に一度の大遠忌も、ここに無事大円成と相成り、慶賀の至りであります。

これもひとえに、宗門関係各師、宗門全寺院の各宗師、檀信徒御一同様方による、道元禅師顕彰への至誠心の賜であり、正に清浄大海衆の威神力と申すべきでありましょう。

大遠忌無事円成は、高祖道元禅師という古佛心への、われわれ児孫の赤心片々、慕古心集合の現成であり、その御垂誠への信心の表れであります。

当北アメリカの地においても、今回御遠忌に因む、道元禅師顕彰の諸事業が挙行されました。

1999年には高祖道元禅師ご生誕800年を記念し、スタンフォード大学での実りの多かった道元禅師シンポジウム、2001年には禅宗寺を会場として、その劈頭を飾った予修法要などが、主に奉修されました。それらは、日本、アメリカの曹洞禅実践者の至純な道心の結集により実現したものでありました。

また、9月15・16日には北アメリカより160余人の曹洞禅実修者の方々が永平寺へ参拝し、法堂御上壇の高祖様御尊像の御前にて至心に焼香礼拝をいたしました。そして、代表5名の各師が感銘深く焼香師を勤められました。その内の、ローリ大道、アンダーソン天真、ベナージュ大円の各師は英語で法語を述べられました。さらに北アメリカの代表として、永平寺法堂での焼香師の見届け役を勤めたワイツマン宗純師は、先導師位に就かれました。これらのことは、永平寺開闢以来初めての出来事でした。

本山法堂にて、日本の随喜各宗師の中へ混じり、高祖様へご供養申し上げる香語を読む力強い音量、献湯菓茶をする真摯な所作、寶鏡三昧を誦経する堂々とした姿、それらは堂内に心地

よい緊張をもたらし、完全に日本の衆侶と融合しておりました。永平寺の人々は彼ら4師の、長年にわたって培われた坐禅習熟の姿に深い共感を覚え、讃嘆の声をあげていました。英語が判らなくとも彼等の求道心がひしひしと伝わってきた、と感想を述べた人もおりました。

この日は永平寺が世界へ向かって、大きな窓を開けた一日だったのです。願わくばその窓を今後もいつまでも開け放しておくことを希望いたす次第です。

今回御遠忌での北アメリカに関する上記のことどもは、日頃道元禅師様の教えを真摯に参究し、実践をしている各寺院及び禅センターの各師、メンバーの方々の清新な修道心より発露した、道元禅師様への尊崇の念、遠忌への純粋な参加の念などに支えられ、実現が可能であった出来事であると、私は認識を致しております。

茲に、北アメリカの曹洞禅実践者の皆様へ、心より厚く御礼を申し上げ、深い感謝の念を捧げ、次の大遠忌までの50年間、更なる正法興隆のため、新たなる出発を皆様と共に手を携え進んで参りたいと存じます。

「幾重にも重なった特別な恩恵を授かって」

―永平寺での道元禅師七百五十回大遠忌法要をふりかえって―

ベナージュ・大円
平等山禅堂　慈法寺

本年、永平寺では３月１日から１０月２０日まで、曹洞宗宗祖である道元禅師の７５０回大遠忌奉賛のため一連の法要が継続的にとりおこなわれました。毎日５回の法要が営まれますから，この期間中にゆうに３５０名を超える数の曹洞宗僧侶が焼香師として高祖様に香を献じるという栄誉に浴することになります。このような大遠忌法要が営まれるようになったのは、道元禅師が遷化されてから３００年ほどあとの１５５２年のことです。当時、いったいどのような経緯で大遠忌法要がはじめられるようになったのか、５０年ごとにこうして大法要（今回のものを含めて計１０回おこなわれている）を催す特別な意義ははたしてどこにあるのかを学ぶことは大変興味深いことだと思います。９回目の大遠忌法要がおこなわれたのは１９５２年のことで、当時，５２歳であられた宮崎禅師はこの大遠忌法要にも随喜されたとうかがいました。おそらくそのときの法要には西洋において曹洞禅を奉じている人々の代表は一人も随喜していなかったでしょう。

８回目の大遠忌が営まれた１９０２年当時、西洋において『禅』という言葉を耳にすることができたのは、臨済宗の釈宗演老師に接したほんの一握りの人々でした。宗演老師は１８９３年太平洋を越えて，その年にシカゴで開かれた世界宗教会議に世界各国から集った宗教者の一人として参加しました。そして１９０３年に帰国するまでアメリカの地にとどまり、富裕な人々の邸宅で禅についての講話をおこないました。その後まもなく大拙鈴木貞太郎が釈宗演老師の指示でアメリカにわたり、数多くの禅に関する書物を英語で著しアメリカの諸大学で講義を行って、アメリカ人の禅への関心をさらに強いものにしました。筆者がこの道に入るきっかけとなったのは、１９５８年に出版された彼の著作の１つでした。しかし、坐禅の修行が実際に根をおろし始めたのは、１９６０年代以降のことで鈴木俊隆老師、前角博雄老師、片桐大忍老師、乙川弘文老師、イギリス生まれで総持寺で修行した慈友ケネット老師など曹洞禅の指導者が活動を始めてからのことなのです。同じころ，ヨーロッパでは弟子丸泰仙老師がヨーロッパ人たちの間にも深い坐禅への関心があることを見出していました。

１９５２年から２００２年にわたる五十年間のあいだに、海外の人々に向かって曹洞禅の教えを広めていった主だった指導者たちはすべて遷化されました。彼らは膨大な数の弟子を指導し、特に熱心な弟子を得度させ、何人かには嗣法もおこないました。そうして嗣法をうけた弟子たちは自分の弟子をもつこと

ができるようになったのです。２００２年、つまり１５５２年から数えて１０回目の大遠忌にあたって、数名の日本人ではない曹洞禅の指導者が焼香師として初めて永平寺に招かれることになりました。

この大遠忌の法要には、焼香師としてヨーロッパや南アメリカからも代表が招待されました。われわれ北アメリカの指導者が焼香師をつとめたあとにはアジアの仏教諸国からの代表も永平寺を訪れることになっていました。さらには多数の曹洞宗の尼僧たち、主に尼僧堂の堂頭老師方も法要の焼香師をつとめました。今回の大遠忌のもつスケールの大きさに思いをいたさずにはいられません。

海外から訪れた焼香師と同伴の檀信徒たちのために道元禅師の生涯の足跡をたどるツアーが組まれ、禅師が若き日に比叡山で剃髪をおこなった場所、その後修行しまた宋から帰ってきたあとに教えを説いた場所、永平寺の諸堂、そして京都で遷化され荼毘にふされた場所を訪れました。わたしは１９８０年代に師家養成所の課程の一環として宝慶寺や興聖寺で修行したり、その他の道元禅師ゆかりの地に拝登したりする機会に恵まれました。そういう場所のことをアメリカでよく弟子たちに話してきかせていました。今回わたしたちはそういった場所にじかに足をはこび香をたむけ読経することができたのです。わたしの弟子たちはアメリカの寺であげているのとまったく同じお経をこうして日本で聞くことができました。自分の弟子の何人かが、みずからの人生の道として選んだ曹洞禅の源流をこうして自分たち自身の目で見ることができる日が来るとは夢にも思っていませんでした。彼らは、「あなたが何について語ろうとしていたかがやっとわかりました。身近でなかったいろいろな名前がやっと覚えられるようになりました。あなたがわたしたちに何を教えようとされていたのかもっとよくわかるようになりました」とわたしに告げてくれました。自分の日本での修行を弟子たちとこうしてわかちあえるようになったというのはなんと喜ばしいことでしょう。

帰国してからの感謝の言葉としてある弟子はこう書いていました。「わたしは棚橋氏が英訳した道元禅師の著作集『雫の中の月』を読み続けています。日本のお寺を訪ねたおかげで道元禅師の言葉や自分のやっている修行のことがより深くわかるようになりました」と。また別の弟子は「自分たちの法脈がいかに深く豊かであり、欠けたところがなく広い含蓄をそなえていることをつくづく実感し、深く心を動かされました。教えがいのちを吹き返し、法を伝えられるということが本当の意味で賜物であり、法を伝えてくれた人々・場所・時代の大切さを感謝とともに知りました。わたしのなかに謙遜さ・情熱・そして決意が生まれました。このかけがえのない体験を与えられたことにこころから感謝しています」と書いていました。

わたしは８ヶ月にわたる一連の大遠忌法要を通じてできた人と人のつながりの大切さに深く感動しました。毎日、各地の寺院から招待された５人の曹洞宗僧侶が信者たちとともに永平寺に拝登しました。永平寺において指導的立場にいる人たちや修行僧たちは日本の各地そして世界各地からやってきた焼香師をその眼で見ることで曹洞禅がさまざまな仕方でどのように行じられているかをよりよく知ることができたでしょう。各地の修行道場から御随喜や手伝いのために永平寺に来た者たちも多くのことを学び他の寺で修行している雲水たちに出会う貴重な機会を得たことでしょう。焼香師をつとめた住職とともに永平寺や道元禅師ゆかりの地を訪れた檀信徒たちは曹洞禅に対してこれまでにもましてより深いつながりを感じるようになったことでしょう。海外からやってきたわたしたちにとって、今回の法要は一緒にツアーバスに乗って旅をするなかで、世界各地に散らばっている寺院や禅センターからきた修行者や僧侶と出会うまたとない良い機会でした。何日も一緒にバスに乗っているうちに、衣の着方までがみんな揃ってきたように思われました。それは永平寺で見た数多くの僧侶たちの素晴らしい見本のおかげなのです。海外各国にいる曹洞禅に関わる人々がお互いの間に良いつながりをつくっていくこと、それが今後ますます重要な課題になっていくでしょう。

この法要の最初からわれわれの参加が終了するまで、永平寺の誰もが全力を尽くしているように思われました。それは彼らがあたかも道元禅師になり代わって禅師自身のもてなしのこころをわれわれに与えてくれているかのようでした。空に浮かぶひとつの月が無数の波の中に姿を映すように、われわれの出あった一人一人の僧侶のなかに宗祖の温かさともてなしのこころがあらゆる場所で映し出されていたのです。

他の焼香師たちがどうだったかを語ることはできませんが、わたしの場合は、永平寺で焼香師として焼香してくださいという招待を一年以上も前にいただいて以来，その栄誉を引き受ける責任の重さに震えるような思いで毎日を送りました。それ以来、お拝をするたびに細心の配慮をしてそれを行なうようになりました。近所に仏具店など一軒もないところに住んでいますから、法衣のしたくをどうするかも考えなければなりませんでした。１７年前、名古屋妙元寺の野沢和光師(沢木興道老師の孫弟子にあたる方)からお袈裟のためにと木欄の麻布を頂戴しました。「馬の歯(歯馬)」模様のお袈裟を作ろうと思い二枚の布片を縫うことから始めました。しかし，その後ペンシルバニアに禅堂を開く仕事にとりかかったため、忙しさにまぎれてそれを仕上げることができなくなってしまいました。弟子の良円・マーラーを尼僧堂へ二度目の安居修行に出したとき、途中まで縫っていたお袈裟を彼女に託し、われわれのお袈裟の先生である岡本公文さんに見てもらい寸法に間違いがないかどうかを確

かめてもらいました。先生は間違いがないことを確認しご自分も把針してくださいました。そして尼僧堂で修行中の他の尼僧さんたちにも把針をお願いしてくださったのです。岡本先生は，沢木興道老師の指導を受け、笠井浄心さんの兄弟弟子にあたる方です。浄心さんは１９７０、８０年代、毎年冬にサンフランシスコ禅センターを訪れ、如法衣のお袈裟の縫い方を伝えた人です。米国やヨーロッパにある只管打坐を実践しているほとんどのセンターでは在家修行者や僧侶が自分の絡子、お袈裟を縫うことはすでにしっかりと根付いた伝統になっています。

弟子の良円は自分でもそのお袈裟の多くの部分を縫い、それをもってペンシルバニアに戻ってきました。平等山禅堂慈法寺のすべての弟子たちも把針を行ないました。こうした多くの人々の助力のおかげで，出発の二日前、とうとうお袈裟が完成しました。

須弥壇の前で読み上げる法語を英語で書くようにいわれたとき（秋葉玄吾総監によればそれは永平寺はじまって以来のことだそうです）わたしは正直途方にくれてしまいました。わたしはふつうの日本語ならわかりますが、古文で書かれた法語となるといつも理解がおよびません。それにみならうべきお手本もありません。自分の心の底から響いてくる言葉を書くしかありませんでした。昨年の９月１１日以降，わたしの国は不安に覆われています。永平寺の須弥壇の前で道元禅師に向かって申し上げる言葉のなかにその出来事からかもしだされる感情が反響してくることは仕方のないことでした。

世界に広がっているあなたの家族たちがここにこうしてあなたの前に集いました
わたしたちはあなたという素晴らしい模範のもとに生まれた兄弟姉妹たちです
五十年前
こういうことが可能になるとは誰も夢にも思いませんでした
あなたが生きた時代偉大な遊牧の民がアジア全域を蹂躙し（ジンギスカンのこと）
誰もが平和を希求していた時代あなたのような指導者が生まれました
わたしたちの世界もそのころと同じように平和を希求しています
わたしたちはあなたの説いた古の道を前進させることをここに誓願いたします
それが報恩の思いのもっとも深い表現だからです

わたしが帰国するのに先立つ数日前、弟子たちを京都駅で見送りました。そこで弟子の一人でフィラデルフィアのセント・スティーブンス大学で宗教を教えているデヴィッド・大乗・カーペンターはこう語りました。「今回の旅はわたしたちにとって、特別な恩恵の上にさらに幾重にも恩恵が重なって授けられたようでした。わたしたちに寄せられるありがたい厚遇には終わりがないように感じられました」と。

こうして７５０回大遠忌はわたしたちすべてにとって生涯最高の旅となったのです。

高祖道元禅師750回大遠忌ツアー報告

舘寺規弘
サンフランシスコ桑港寺国際布教師

第1日（9月13日）

全米各地からの禅センター、日系寺院のメンバー等、全ての参加者が京都へ無事到着した。夕方からやや天候が崩れたが、9月中旬とはいえまだまだ残暑がとても厳しい日であった。

第2日（9月14日）

最初の目的地は比叡山・横川(よかわ)。曹洞宗の宗祖道元禅師の得度の地である。横川の参道の入口にてバスを降り、延暦寺横川中堂を横手に見ながら歩くこと20分程、山あいの一番奥に位置する「承陽大師之塔」と彫られた石碑の立つ得度の地へ到着した。献花、献香をし、一同揃って諷経を挙げた。

今回の高祖道元禅師と太祖瑩山禅師の遺徳を偲ぶツアーの最初の訪問先が道元禅師得度の地であった事は非常に感慨深いものがあった。

次の訪問先は京都市左京区にある詩仙堂丈山寺(しせんどうじょうざんじ)。京都に来たならば一度は訪れてみるべき美しい庭園をもつ曹洞宗の名刹である。

拝登諷経に続いて石川順之住職から詩仙堂の歴史について説明を受け、その後庭園内散策、茶菓の接待を受けた。

昼食の後、宇治市・興聖寺(こうしょうじ)へ向かう。中国での修行を終えられた道元禅師が日本で初めて開かれた本格的参禅道場である。現在の伽藍は江戸時代に再建されたものであり、道元禅師在世中の興聖寺は現在の伏見区にあったとのことであった。しかしながらその雰囲気は時の正法興隆に全霊をかたむけた初期曹洞教団の姿を充分に想像させるものであった。法堂

にて諷経を挙げ、御開山道元禅師に焼香、礼拝させて頂いた。

この日最後の目的地は東山・円山公園の近くにある道元禅師荼毘塔。このあたりはその昔、建仁寺の火葬場があった場所で、道元禅師もここで荼毘にふされたと弟子である詮慧という方が自著されている。一同この日最後の諷経を挙げ、禅師の遺徳を偲んだ。

第3日（9月15日）

この日は朝からバスに揺られること数時間、京都から福井へ向かう。福井市内で昼食の後、大野市・宝慶寺を目指した。

この宝慶寺は永平寺と非常に関わりが深い。道元禅師が中国での修行を終え日本に帰国されたのを慕って来日された中国僧、寂圓禅師の開山である。またこの宝慶寺は、後に永平寺の貫首となられた高僧を輩出したことからも、永平寺に次いで日本曹洞第二道場とも呼ばれている。

英語の般若心経にて諷経を挙げた後、田中真海住職より法話をいただき、開山堂をはじめ諸堂を拝観、ここでも茶席にあずかった。

（その他の寺院にてもそうだったのだが、このような有り難い仏縁を持てたことに只々感謝するのみであった。）

深山幽谷の道場の空気を身体全部で味わった後、我々はいよいよ今回のツアーのメインである大遠忌本法要に向け、永平寺に出発した。

山あいの国道を走ること３０分程、永平寺門前に到着。やはり５０年に一度の大遠忌からか人出も多いようだ。

龍門にてバスを降り、永平寺の宿泊・研修施設である吉祥閣に入った。

ここで、このツアー自体には参加していない各禅センターの団体とも合流し、その後入浴を済ませ薬石の膳についた。元ＬＡ禅宗寺開教師でもあった永平寺の松永国際部部長より挨拶を頂戴した後、全員で五観の偈を唱え、薬石を頂いた。

この夜は、曹洞宗宗務庁の計らいで国際交流会という記念行事が催された。

北アメリカ、ヨーロッパ、そして日本と総勢２００名を超える参加者を迎えて開かれた交流会は、曹洞宗宗務庁の森嶺雄総務部長による開会の挨拶で始まった。南澤道人永平寺監院、野田大燈總持寺後堂の歓迎の挨拶、「永平寺の一日」と題した映画の上映に引き続いて、各地域代表（北アメリカ・秋葉玄吾国際布教総監、ワイツマン宗純伝道教師　ヨーロッパ・グワレスキー泰天伝道教師）による現状報告がなされ、それについての活発な質疑応答も交わされた。

最後に、短い時間ながらも全員で坐禅を組んだ。わずかでも全員で永平寺の静寂を共有することが出来たのは、本当に素晴らしいことであった。

第4日（9月16日）

まだ薄暗い早朝３時１０分、各々起床して手早く洗面を済ませる。その後、各禅センターの団体は大講堂での暁天坐禅へ、禅宗寺や桑港寺などの日系寺院のメンバー等は光明蔵での法話を聞きにそれぞれ向かう。早暁の静寂の中、永平寺の一日が始まった。

大梵鐘が打ち切り、暁天坐禅の終わりを告げる大開静、そしてその後を追うように打ち出され、法要の始まりを伝える法堂の鐘。全てが聞き慣れているはずなのに、何故だか懐かしさよりも新鮮さを覚えた。

午前５時、南澤監院導師による献湯諷経。永平寺山内だけでなく、日本全国から集まった僧侶約２００名による重厚な読経の中、参加者全員が高祖道元禅師真前にて焼香、礼拝をさせて頂く。数々のゆかりの地、または寺院、そしてこの本山で、遠い海を隔てた地から来た法孫達に、禅師自身が中国・天童寺（てんどうじ）にて如浄禅師に相見した時と同じように焼香礼拝を受けた道元禅師はどのような御心境なのだろうか。不謹慎かとは思いつつもそんな事を感じてしまっていた。

この日、北アメリカからの最初の焼香師は秋葉玄吾国際布教総監。そして、バークレー禅センターの堂頭であるワイツマン宗純師が、この法要を含め４つの法要で焼香師を先導する先導師という大役を果たされた。

この時間は、朝課引き続きの早晨諷経ということもあり参加者全員が随喜した。普段人前に出る機会の多い秋葉老師だが、この時ばかりはやや緊張した面持ちに見えた気がした。この日の行持のために尽力してこられ、いよいよ本番を迎えたというその心中はいかほどのものであっただろうか。

早晨諷経に引き続いて参加者全員で光明蔵に赴き、永平寺貫首であられる宮崎奕保不老閣猊下に拝問し、御垂示を頂いた。今年１０２歳を数えられた宮崎禅師様であったが、とても元気な御姿を見せられ、時折笑顔も覗かせながら御垂示下さった。その後、禅師様を中心にして全員で記念撮影に収まり早朝の行持は終了した。我々は本当に有り難い勝縁に恵まれたと、ここでも只々感謝するのみであった。

小食後、小休止をはさんで午前１０時半よりペンシルバニア・慈法寺のベナージュ大円師焼香による禹中諷経、続いてニューヨーク・道真寺のローリー大道師焼香による午時諷経が修行された。この法要で、長い永平寺の歴史の中でおそらく初めてであろう英語による法語が読まれた。

午後からは、カリフォルニア・蒼龍寺のアンダーソン天真師焼香による下午諷経が修行され、そして最後の哺時諷経には、奥村正博国際センター所長が焼香された。

各焼香師いずれの方も、ひとしきり緊張した面持ちで大役を終え、安堵の笑みで記念写真に収まる姿が印象的だった。それは、焼香師だけではなく、先導師、侍者、侍香、その他全ての随喜者、参加者が北アメリカを代表しているという誇りと責任感、そして何より感謝の気持ちを抱いてこの報恩の大行持を全うしたという事が自然にその笑顔を生んだのだろう。大げさかもしれないが、７５０年という永平寺の歴史の中で、西洋に向けてここまで門戸が開かれたのはおそらく初めてなのだから、それも言い過ぎではないだろう。

法要の合間には、参加者各々永平寺内の自由拝観や門前の散策、随坐などをして過ごした。あいにくの曇り空で、時折雨の落ちる天気だったが、雨の永平寺もまた一興とばかりにそれぞれが永平寺を満喫していた様だった。

その日の夕刻、一行は永平寺を後にした。「来る者は迎え、去る者は送る。」そんな言葉を思い出させてくれた本山であった。

この夜、一行は石川県・片山津温泉に宿泊した。永平寺での長い一日の緊張と疲れを温泉の湯が癒してくれた。

第５日（９月１７日）

大遠忌法要を無事に終え、祖跡拝登の最終日であるこの日、私達一行が訪れたのは、大本山總持寺祖院、永光寺、そして大乗寺。いずれも、曹洞宗中興の祖と呼ばれ、道元禅師と共に両祖と仰がれる太祖瑩山禅師ゆかりの寺院である。

始めに訪れた先は奥能登・総持寺祖院。現在の日本における曹洞宗1万5千ヶ寺の原点とも言える寺である。それは道元禅師が示された正伝の仏法、そして膨大な著述によるその宗乗を、瑩山禅師がその教えに基づいて多くの秀でた弟子を育てつつ、在俗教化にも熱心に力を注ぎ、その教えを時勢と調和させながら全国に広められたためである。

参加者一同、今の我々の基礎を築いて下さった瑩山禅師をはじめとする先達の遺徳を偲びながら諷経を挙げ、焼香させて頂いた。諸堂を拝観し、奥能登の美しい庭園に山水古木の趣を感じた後、一行は江川辰三監院よりご挨拶を頂戴し、加えて裏千家の皆さんによるお手前まで戴いた。一同また深謝のうえ、皆様の見送りを受けながら祖院を後にした。

昼食の後、一行は羽咋市・永光寺に向かった。この永光寺は瑩山禅師が總持寺の前に能登の地に開かれた道場であり、総持寺を弟子の峨山（がさん）禅師に譲った後、その余生を全うされた寺でもある。

また瑩山禅師はこの永光寺の奥に、道元禅師の先師・如浄禅師から自身までの五代にわたる禅哲の霊廟、「五老峰（ごろうほう）」を築かれた。釈尊より受け継がれてきた正伝の仏法の法燈を重んじる瑩山禅師は更に、

「出家在家もろもろの門弟一味同心し、当山を以て一大事とし、とこしなえに五老峰を崇敬し奉り、専ら門風を興行すべし。これ即ち瑩山が尽未来際の本望なり。」

と、置文にまで記されている。

瑩山禅師の本望を引き継いでいるか、そして未来へ引き継いでいけるか。諷経、焼香させて頂きつつ襟を正された思いがしたのは私だけではないと思う。

今回の高祖道元禅師と太祖瑩山禅師の遺徳を偲ぶツアーで最後に拝登したのは金沢市・大乗寺。瑩山禅師の本師、永平寺第三世・義介禅師開山の寺であり、瑩山禅師は第二世にあたる。禅師は永光寺を開くまでの１０年間、ここで住職を勤められた。

またこの大乗寺はその歴史の中で、特に修行の厳しい道場として「規矩大乗（きくだいじょう）」とも呼ばれてきた。総門から山門、仏殿へと続く参道に、その厳格なる門風の一端を垣間見たような気がした。お陰様で今回のツアー最後の諷経も更に引き締まったものになった。

第６日（９月１８日）

早朝、金沢より出発。参加者各々が今回の旅の総括をしながらバスは一路解散の地、京都へ向かう。

京都駅到着後、一同は解散した。長いようで短かった、短いようで長かったツアーは幕を閉じた。

～おわりに～

今回のこの大遠忌ツアーは、一言で言えば、我々がまさに釈尊から伝わる仏法の法孫であることへの再認識をさせて頂いたツアーだったと思う。そしてその法燈を正しく実践し、伝持していく責任というものを自覚させて頂いたと言えるのではないだろうか。

日程の都合上、一つの寺院での滞在時間が短かったと言う意見もあるだろうが、今後、北アメリカの地で釈尊以来の仏法を宣揚して行かんとする我々に、幾つものヒントを与えてくれた旅であったと信じている。

最後にもう一度、このツアーの為に御尽力下さった関係各位、そして我々一行を温かく迎えて下さった全ての皆様に感謝申し上げます。

アメリカの曹洞禅（6）

「クィッター　曹洞禅の修行を中途で放棄した人たち」

ジョン・マックレー
インディアナ大学

序

このところわたしは「曹洞禅の修行を中途で放棄した人たち」のことをしきりに考えています。ここでは彼らのことを「クィッター（quitter）」（quitは「離れ去る、放棄する」という意味の英語動詞）と呼ぶことにします。いまのところ、この「クイッター」たちをどう厳密に定義するかということについては結論を下していません。ですから、一週間とか一年間にかぎって修行を「中断」しているだけの人も、あるいはもうすっかり修行から離れてしまい二度ともどってこない人もともに「クィッター」であるということにしておきます。それと同様に、曹洞禅の「修行」という言葉が何を意味するかについてもまだわたしは厳密な定義を決めていません。このテーマに関して十分に豊富なデータが揃っていない今の時点では、あまりに細かい枠組みをはじめから決めてしまうのは賢明なことではないからです。ですからいまは、どのような意味においてでも自分のことを「『元』曹洞禅修行者」であるとみなす者なら、その人を「クィッター」と呼んでさしつかえないことにしておきます。

わたしが「クィッター」たちと話がしてみたいと思ったのはどのような理由からでしょうか。この問題について接触したほとんどすべての人はわたしがいったいどういうつもりでこんなことを調べているのかと疑問に思ったようです。そのうちの何人かは敵意とまではいかないまでも、少なくとも確実に困惑以上の感情をわたしに対して表明しました。

もしなにかがうまく機能するとき、その様子を知ろうとするなら、それがうまくいかないのはどういう場合かを吟味してみるべきだというのがわたしの考え方です。たとえば、空港の安全対策のことを考えてみましょう。そのシステムがうまく機能するかどうかを知ろうとするなら、それがどのようにして機能不全に陥るかを考察しなければなりません。一人の馬鹿な人間がはやく野球を見に行こうと焦って列からとびだしたがためにロサンジェルスやアトランタといった大きな空港で何千人という旅行者が締め出しを喰らうというのはまったく馬鹿げています。それは、ひどい機能不全におちいったシステムというべきでしょう。

安全対策システムは「しなやかさ」を備えたものでなければなりません。つまり、どうしても避けることができないような失敗の影響を最小限に抑え、システム全体が停止しないようにその失敗を限られた範囲でくいとめることができるだけの柔軟性をそなえていなければならないのです。こうしたやりかたでは、空港全体のあちこちにばらばらとチェックポイントを配備するのではなく、各関門、あるいはほとんどのウィングごとにチェックポイントを置くのです。そうすれば、突発的にどんな支障が起きてもそこでくいとどめられますし、より容易に問題が解決できるはずです。（こうした問題をさらに議論するうえで、チャールズ・C・マンが『アトランティック・マンスリー』2002年９月号に載せた『自国の不安全』という記事を参照してください）

さて、ではアメリカにおける曹洞禅の「しなやか度」はどうでしょうか？曹洞禅はどの程度に「うまく」失敗しているのでしょうか？曹洞禅をどう人々に提示するか、そして人々がそれをどう受容するかについては、いろいろと異なった仕方があります。とすれば、それらの異なった提示－受容の仕方において、それぞれどういう失敗の仕方が起きているのでしょうか？禅の修行を一時的に放棄したり、あるいはそこからすっかり離れてしまった人たちのことを考察することは、はたして曹洞禅の伝統を全体として理解するうえでの一助になりうるのでしょうか？

クイッターたちとの接触

こうした疑問に答えようとするとき、まず直面する問題はクィッターたちとどのようにして出会えばよいのかということです。ここまでクィッターをめぐる問題をとりあげてきましたが、そのとりあげかたはわたしが実際に経験したこととは，実は順序が逆だったのです。各地の禅センターに足を運び、そこで禅修行を始めて間もない人から、長年にわたって修行を続けてきている人までさまざまな人たちにインタヴューをしてきました。しかし、わたしはこれでは何かが欠けているのではないかといつも感じていました。つまり、かつてはそこにいたけれども今はもういなくなってしまった人たちのことです。そういう人たちに会って話を聞けないものだろうか？

いろいろな人たちにこの問題を切り出したところ、「インターネットを使ってみたらどうか」という示唆をしばしば受けました。たとえば、オンライン上のディスカッショングループであるThe Wellに参加してそのテーマについての対話を始めてみてはどうか，あるいはwww.zen-forum.comに登録して問題を提起してみてはどうか、いろいろな電子メールのディスカッションリストに掲示を出してみれば誰かが応答してくるかもしれない・・・といった具合です。

そこでそういうことをみんなやってみました。その結果がいまわたしのもとに集まりはじめているところです。そうそう、もうひとつ打つ手がありました。それは、この『法眼』誌の読

者である皆さんにお願いしてみることです。もしあなたかあなたがご存知の誰かがこの問題に関してわたしと話して見たいと思われるならぜひjmcrae@Indiana.eduまで連絡をください。特に電話でのインタヴューに応じて下さる方を探しています。もちろん電子メールでコメントや洞察を送ってくださることも大歓迎です。(この場をかりて、前回の論文『学校における禅』についてのコメントや洞察をお寄せくださった方々にお礼を申し上げます)

クィッターたちと接触してみて

この問題についての情報収集はまだ始まったばかりですから、これから述べることは決して最終的な結論と呼べるようなものではなく、あくまでも経過報告にすぎません。これまでのところすでにかなりの量のオンライン上での対話を経験してきました。有益なものも少しはありましたがなかにはひどく腹の立つようなものもありました。www.zen-forum.com上での「禅修行」ディスカッションの参加者から届いた最初の応答はたいへんぞんざいで、人を小馬鹿にしたようなものでした。「曹洞禅を離れ去っていった人たちは、彼らがほかの何かを止める時の理由とだいたい同じ理由でそうしたのですよ。たとえば、妊娠したとか、自分にあわなくなったとか、修行の目的はわかったけど実際にどうしたらいいのかわからなかったとか、云々」確かにそのとおりかもしれません。しかしこの人のいうことはあまり有益ではありません。「禅の指導者にもっとも優秀だった弟子たちのことをきいてごらんなさい。途中で止めていったのは実はそういう人たちなんですよ」という人もいました。なるほど、そうかもしれません。しかしわたしにはあまりにも冷笑的な見方のように思えます。また別な人は「答えてあげてもいいけど、実はぼくはまだ修行を始めてさえいないんだよ」と書いてきました。こういう利口ぶったたわごとにはコンピューターで作った笑い顔が添えられていました。

こういう連中にこの主題をもっとまじめに考えてもらおうと、どういう経緯でわたしがこの問題と取り組むようになったかを説明するのになんども手紙のやり取りをしなければなりませんでした。この原稿を書き始める直前にもらったメッセージは、なんと大喧嘩をはじめてやるぞと脅しをかけるような内容のものでした。その理由というのはこのトピックとは何の関係もないものでした。インディアナ大学の「東洋の言語と文化学部」の同僚にこの話をしたところ、彼はTAOISM－Lという道教のことを学ぶ学生のための電子メールディスカッション・リストが解除に、文字通り完全閉鎖に追い込まれたいきさつを話してくれました。自称「道教徒」が学者たちにひどい喧嘩を仕掛けてきたからだというのです。

そのとおり。こういうわけでオンライン上の討論は完璧な調査媒体とはいいがたいものです。とはいえ、まったく駄目というわけでもないのです。少数とはいえ有益だと思えるような議論も確かにありましたし、それに加えて、仏教研究に携わる大学院生と教師に限って公開されている穏健なオンラインディスカッションであるH－BUDDHISMに問い合わせをだしたところたくさんの有益な応答が寄せられました。わたしの問い合わせを他のオンラインディスカッションリストにも載せてあげようといういくつかの応答もありました。ですからじょじょにではあれ、有益な情報収集のためのわたしのこうした努力は今後も少しずつ広がっていくだろうという感触をもっています。

期待と曹洞禅修行の「失敗」

まずはじめに「クィッター」と「不首尾・失敗(failure)」という言葉をわたしがどういう意味で用いているかをはっきりさせておく必要があります。わたしは、曹洞禅に関わるのをやめた人たちが必ずしも曹洞禅の修行において「失敗」したのだと言いたいのではありません。そうした行動上の変化は彼らにとってきわめて正しい選択であったかもしれないと認めるのに何のためらいもありません。

第二に、「中断/放棄」あるいは「禅の修行」ということばがどのように定義されるにしても、わたしはあらゆる形態の禅修行の中断/放棄をすべてふくめて考察していきたいと思っています。これは何度か見聞したことですが、外からでもそれとわかるような明確な禅の活動から足が遠のいたりあるいは完全にやめてしまった場合でも、それが当人にとってはかならずしも禅とのかかわりが終わったことにはならないのです。正式な禅の修行形態から人生上のそれほど目立たず控えめなテーマへと人生の焦点が変化することは充分あり得ます。各地でのインタヴューを重ねる中で、自分はいま、かつてやった集中的な禅修行とは異なる時期を過ごしているのだと述べる人たちに会いました。禅がそれほど表立たず、どちらかといえば隠れているこうした時期が何年も続くことがあります。近いうちにインタヴューしたいと思っている人々のうちの一人は、自分のことを「元クィッター(former quitter)」とよんでいます。長年にわたってまじめな禅の修行者であり指導者でもあった彼は、その後ある意味ではそこから去って別な人生の領域に移り、そして最近再び、曹洞禅の世界にもどって活動しています。この人のことは引き続いてお伝えしていくつもりです。

第三に、もし仏教が「アナログ宗教」であるなら坐蒲から去るのに無数の異なった仕方があるはずです。「アナログ宗教」というのは、(少なくともアメリカのエリート仏教徒たちにとっては)自分がそうありたいような仕方で仏教徒であることが可能であ

るということです。それと対極にあるのは或る形態のキリスト教やイスラム教のような「デジタル宗教」で、そこでは「全か無か」という仕方で改宗するのです。この国において禅を修行するにあたっては考えられる限りのあらゆるやりかたがありえますが、そのそれぞれのやり方の修行を止めるにはやはりその形態特有のやり方があるようだといってもあながち間違いではないと思います。

さてこのさき論議を進める上で以上のことを確認しておけば充分でしょう。人々が禅の修行を放棄するのはなぜなのでしょうか？またそれはどういうふうにして起こるのでしょうか？

ここで、オンライン上のディスカッション仲間数人が正しくも指摘したことに触れましょう。それは「期待」ということが基本的要因としてあるということです。或る人はこう言っています。

「いかなる宗教的行であれ、人がそれをやめる主要な理由は自分の期待していたことが満たされないからだ。われわれは期待が満足されるときにはいつでも、そこに至ったプロセスがうまくいったからだと思いがちであることを考えてみなさい。しかし実はそのことは、きっとうまくいくだろうと見越したプロセスが自分がそう願ったようなし方で起こったからこそ、うまくいったのだということを必ずしも意味するのではない。それは人々が自分で自分を誤解させているからだということを忘れてはいけない。われわれが見ているのはそのプロセスのしごく明白な性質なのだ。つまり、人はある期待をもって禅にやってくる。その期待が実現されなくて人は禅から去っていく、それだけのことなのだ。

しかし禅には期待を手放せとはっきりと説く教えでもある。期待に執着している者にとってこういう考えはたいそう難しい。それは次のようなプロセスを創り出してしまうからだ。ある期待をもって禅にやってくる。その期待を手放す。するとその人は禅を修行する明確な目的を見失ってしまう」

これはたいへんいい議論の出発点です。しかしわたしは実際にはこのことよりもさらに大きな要因が絡んでいるように思います。ここでは期待をもつことの問題点が仏教的修行の主要な目的のひとつは先入観や間違った分別を取り除くことにあるというレトリックを用いて提示されています。わたしの側からすれば、人々の日常生活において期待というものがどのような機能を果たしているかということが疑問としてあります。もっと具体的にいえば、われわれが住んでいる社会において、ひとびとはどのようにして宗教的指導者やかれらの教えについての期待を増大させていくかという問題です。彼らの人生の途上においてそれらの期待がどのように働いているのでしょうか？

あるインタヴュー

ここで、最近おこなった電話によるいくつかのインタヴューのうちのひとつを紹介しましょう。これはH－BUDDHISM上でのわたしの問い合わせに応じて実現したものです。インタヴューをした相手は二十代なかばの中西部に住む独身男性です。彼は不可知論的な父親と保守的・福音主義的なキリスト教徒の母親の間に生まれました。高校の最終学年のとき、インドのチェナイで学び、ヨガや瞑想についての関心を持つようになりました。そのときにはもうすでに禅について幾分かの知識をもっていました。その後、大学三年の時には京都に留学しました。そこで禅に深く関わるようになりいくつかの禅寺での接心にも参加したりしました。しかし米国に戻ってからはいくつかの要因のせいで禅修行を止めることになりました。ひとつは両親（とくに母親）が自分の息子が独身を守って宗教的な修行に一生をささげる（当時彼はそうすることも将来の選択肢の一つとして考えていたのです）ということにひどく反対したからです。もうひとつは、大学四年生の時に坐禅に興味をもつ友人を一人も持つことができなかったことです。彼はいまでは禅を永久に放棄したと言っています。禅的な人生への態度はいまでも自分にとって重要なものであることを彼は認めています。彼はいま婚約中です。彼は現在、禅を修行するのではなく、大学院でそれを学問的に研究しています。

もちろん以上はこの人物のきわめて大雑把な人生の要約でしかなく、ここでの議論のためにたくさんのことを簡略化してのべました。しかし、わたしがここで強調したいことはこの若者の禅への期待がどのようにして育っていったか、そのあり方、そしてそうした期待が明確な形態をとった禅修行を放棄することにどう影響したかという点なのです。彼は日本にいるあいだに「禅とはこうでなければならない，こうあってはならない」という強固なイメージを育てあげていきました。或る寺のあり方が理想的でありそれ以外の道場はとうていそれには及ばないのです。アメリカに帰って訪れたどの禅センターも彼にとっては合格点に達しませんでした。アメリカで教えられている禅はどこか浅薄で精彩を欠いているように思えたのです。（実際には彼の住んでいた大都市地域にはいくつかの禅グループがあって接触することもできたのですが、彼は車を持っていなかったので通うのが困難でした）

さらに悪いことには大学四年のときに彼は『臨済録』を教授の一人と一緒に中国語で読んだのです。そしてそこで展開されている禅独特の偶像破壊的な表現による「修行の脱構築説」に影響をうけ「もう修行の必要はない」という結論に達してしまったのです。これはまさに機能不全に陥った禅の実例です。禅の伝統そのものがその伝統から手を引く理由を提供してしまったからです。（わたしは、宗派的だという罪悪意識をもつことな

く、もし彼が道元の『弁道話』か『現成公案』を読んでいたら彼の人生はどうなっていただろうかと考えてしまいます)

彼の禅へのアプローチは完遂しなかった回心体験、あるいは長続きしなかった若者特有の恋愛のように思えます。わたしは彼のことを軽蔑してこう言っているのではありません。しかしそこには多くの思春期後期・二十代の若者がよく経験する人生のかたちがあるように思います。つまり、この若者はまず人生を生きるのに最善の道は何か、考え得る限りでもっとも深く充実した未来とはどのようなものであるべきかを考えました。彼の場合、それは瞑想と宗教的な奉仕に人生をすべてささげて生きるということだったのです。彼の場合、問題だったのは或る特定の禅修行のやり方だけに固執したことでした。その禅修行のやり方は実はある特定の社会体制と信者の要求に応える聖職者としての禅僧の役割というものを前提として初めて成り立っているものであり、単に個人がお互いに宗教的な訓練において関わるというような単純なものではありませんでした。彼は結局、禅の修行を続けることができませんでした。それは彼が無限の可能性をもつアナログのレンズを通してではなく、限られた宗教的選択肢しかないデジタルなレンズを通してしか禅の修行を見られなかったからです。アメリカにもどってからというもの、彼が禅仏教徒としてのアイデンティティを持ちつづけそれを成熟させていくことを援助してくれた人はひとりもいませんでした。

ですから彼はいまはもうはっきりとした形態においては禅仏教の修行に関わっていません。それはある意味では残念なことです。しかし将来，宗教的な道に再び関わろうという気持ちがこの人物のなかで決して燃え上がらないと誰が言い得るでしょうか？禅とは何でありどうあらねばならないかについて彼のゆがんだ期待とわたしが呼んだもの（勝手ですがここでは純潔と理想的な禅寺のあり方について彼の思い込みをこう評価させてもらいました）があったとすれば、彼からなにかがはずれ落ちなければならなかったのです。興味深いことは、いま彼が自分の宗教的アイデンティティについて述べるときに使うのは彼の父親のそれについて述べるときに使った言葉とほぼ同じ言葉を用いているということ、そして彼が婚約している女性は自分の母親と同じように彼（あるいは彼の父親）よりもはるかに自分の宗教(仏教でもキリスト教でもない)に関心を持っているということです。わたしはこの人物との面接を引き続いて行ないたいと考えています。そこで自分の人生と両親の人生が明らかに平行的であることに気がついているかどうか、それについてどう思うかについてたずねてみるつもりです。わたしはつねひごろ通俗心理学的な解釈に陥らないよう用心せよと自分に言いきかせ続けていますが、この人物とのインタヴューで見受けられるパターンははっきりとしたものです。

結論的ではない考察

この人物についてのわたしの即席の分析が的を得たものであるにせよそうでないにせよ、人間のもつ期待には深層心理的なパターンがあると結論してもそう間違いではないように思います。それについて考察してみればそう驚くべきことでもありません。以上の議論で、この問題にはある複雑な人間的ダイナミズムが関わっていることを示すことができたのではないかと思います。

「なぜ人々はやめたのか」という問いに対してわたしが受け取ったもっとも共通した答えのひとつは「それがあまりにも難しいからだ」というものでした。時にはその難しさと言うのは単に長い時間坐禅をし続けることの困難さのことを言っているのかと思うときがあります。確かにそれはわたしたちのように坐るとひざや腰が痛くなるものにとっては重大問題です。しかし、それ以上に禅修行の難しさのなかには自分のやっていることが伝統に適合しているかどうか、その道をかつて歩いた人々が自分自身や他の人々に長年にわたってそれを示してきたやり方にあっているかどうかを考えなくてはならないということが含まれているのです。上記の誤った禅修行へのアプローチということでは、わたしの匿名の情報提供者が述べたことですが、わたしの評価によれば、修行を心理学的なテクニックとして考える傾向が指摘できます。この人は自分の禅へのアプローチをきわめてはっきりと「自助的セラピー」であると述べていました。

禅をひとつの自助的セラピーとして理解することについてはどこにも道徳的に間違ったところはありません。もちろん彼の人生においてそれが間違ったことであるなどという気は毛頭ありません。しかし、そういうアプローチでは禅の修行が多数ある選択肢のひとつ、一時的な傷を治す膏薬のひとつでしかないものになってしまいます。禅の修行が本当に困難であるのはいかなる特定の結果にも依存しないような仕方で実行されなくてはならないと言うところにあるのではないかと思います。修行を続けている人たちが共通して報告するのは「自分たちがなぜそれをしているのか、修行が果たしてうまくいっているのかどうか必ずしもはっきりしていない。けれどもそれ以外に生きようがない」ということです。www.zen－forum.comで知り合った新しい友人が指摘したように、期待を持つことが問題の一部になっているのです。曹洞禅からはなれないでいる人たちは、おそらく最初に持っていた期待が解消してしまい、それ無しでも修行を続けていける人たちなのでしょう。それこそが「菩薩の道」の現代的定義と言えるのかもしれません。

打坐をめぐる断想集
私の『坐禅参究帖』（十）

藤田　一照
パイオニア・バレー禅堂

≪断想　１９≫　全一の坐禅（２）　身・息・心の全一性

上では、坐相・調身にのみ焦点をあて、その「全一性」のありかたについて論じた。しかし、厳密にいえばこういう論じ方は不適当なのだ。実際には、坐相が全一的なものになるためには他の二つ、調息と調心を欠かすことができないからだ。だから本当の意味での「坐禅の全一性」とは「身・息・心の全一性」でなければならない。上で論じたのは実は、身体面において、その全一性がどのように反映されているかということなのだ。

坐禅の実際においては、調身・調息・調心という営みは本来分離不可能であり、この三つのどれ一つを欠いても他の二つは成り立たないのだ。「身・息・心は三即一、一即三」、「身・息・心の三位一体」

たとえば、『普勧坐禅儀』には「鼻の息はかすかに通ずべし」という調息に関する至極簡潔な指示がある。『永平清規　弁道法』や『永平広録』にある道元禅師の調息に関する他の記述を参考にしてこれを理解すると、調息とは、「鼻を通じて、空気が下腹部において自然に（作為的でなく）出入しているような状態（丹田息とよばれる）で呼吸することで、その際にいきが荒々しくなって声がしたり、あえいだり、息苦しさを感じたりするようであってはならず、『かすか』でなければならない」ということになろうか。このような「かすかに通ずる静かで深い」自然な息づかいで呼吸をおこなおうとしても、姿勢に不備があったり、心が乱れたりしていては、とうてい不可能である。

また坐禅中にあらわれる不快感や不安定感、昏沈（こんちんこころが沈んで活気がなくなり働かなくなった状態）や散乱（こころがいろいろの物事に引き回されて少しも静まらない状態）などの心理上の諸問題も、姿勢や息の不整が背景にあるのだ。だから、それを無視して、心理の問題なのだからと心だけでなんとかしようとしてもできるものではない。ますます事態を悪化させるもとになるだけだ。

身相をととのえるためには、前の断想で触れたように鋭敏な感受性が不可欠であるが、そのためには調心のはたらきによって心が静まり醒めて澄みきった状態になければならない。また、調息へむけての工夫は必然的に坐相の矯正につながっていく。

私自身の経験をここでさしはさんでみたい。始めの数年間、私にとって坐禅は痛みとの戦いであった。「いつ、こんな痛い思いをせずに坐れるようになるのだろうか」という願望を常にこころのどこかに置きながらの坐禅であった。ヨガやストレッチング、断食などを自分なりに試みて、すこしでも早く坐禅が楽にできるような体になろうと、一生懸命努力をしたのだが、やはり痛いものは痛いのだった。それが或る接心の時、坐禅していてふと思った。「そうか、坐禅というのはどうやっても痛いものなんだ。『痛くない坐禅』などというのはオレの妄想だったんだ！もう痛みと戦うのは止めて、それと一緒に坐ろう。」そういう思いが浮かんだとたん、痛みの味（？）がスーッと変わったような気がしたのである。そして体全体の緊張がほぐれて背筋がスッと伸び、呼吸もずっと楽に出来るようになった。痛みが消えてなくなったのではない。依然としてそこにあるのだが、こころの中でそれとの関係の持ち方が変わったとたんに期せずして姿勢と呼吸にも変化が起こったのだった。それとともに痛みも軽くなったように感じられた。（筋肉の緊張が緩んだせいだろう）心において、「痛くない坐禅」への願望という余計な荷物が手放されて落っこちると、それが身と息に即座に響いてきたのである。

以上、身・息・心の「三即一、一即三」の関係の実例をいくつかあげてみた。結局のところ、身・息・心が渾然一体となって調和的にはたらくことで、正身端坐といわれる身心がそこに現前し、生き生きと息づいているというのが全一の坐禅の当体だということだ。

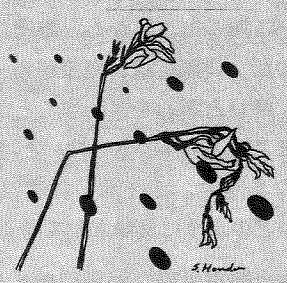
さて、我々の日常のありかたに目を転じてみると、このような全一性からはほど遠いありかただといわざるをえない。身は中心を喪失して五体散逸の相を呈し、息は浅く不規則で、心は「意馬心猿」といわれるように動揺・散乱を繰り返している。心が過去や未来のことに捕らわれてしまっているために、身と心が分裂状態に陥っている。・・・このような我々が坐禅をするのであるから、最初から全一な坐禅ができることはまずないといってよいだろう。一応の指導は受けても、後は自分の手さぐりでいくしかないのだが、その手をいざどこからつければよいのか、まったく途方に暮れてしまうというような経験をさせられる。そして、ともかく試行錯誤を繰り返すのだが、なかなか坐禅が坐禅に徹底しない。とうとう、おれは坐禅に向かないから止めてしまおうというところまで追い詰められる。そこで止めるか、それとも思い直して坐り抜くか。身・息・心が全一である坐禅が実は自己の正体（正しいありかた）なのであり、結局そこに帰らないかぎり本当の「安身」「安息」「安心」はないという深い理解と強い確信がなければ、それをめざす無限の精進を続けることはできないだろう。

ニュース

◎**5月18日～6月1日**まで福井県小浜市発心寺専門僧堂において伝道教師研修所が開催され、ヨーロッパから6名、北アメリカ2名が参加した。

◎**6月30日**イタリアのミラノ市に曹洞宗ヨーロッパ開教総監部が約20年ぶりに再設され、開所式・記念式典が厳修された。ヨーロッパ国際布教総監には、福井県発心寺住職、前大本山總持寺西堂の原田雪溪老師が着任された。

◎**7月21日～30日**多々良学園高校の語学研修会が、グリーンガルチファームで開催され、生徒6名と引率教員2名が参加した。



◎**9月15日**大本山永平寺にて曹洞宗宗務庁主催により曹洞宗国際交流か開催され、ヨーロッパ、北アメリカ、日本から延べ250名が参加した。また、同日ヨーロッパからの代表3名、南アメリカからの代表1名が高祖道元禅師750回大遠忌法要の焼香師を勤められた。16日には、北アメリカからの代表5名が焼香師を勤めた。

詳細は桑港寺国際布教師舘寺規弘師の記事をご覧下さい。

訃　報

・去る7月26日、35年間に渡り北アメリカ開教師として活動された乙川弘文師が遷化された。乙川師は、オーストリアで行われる摂心のため渡欧、スイスのエンジェルバーグにて休暇中事故に遭われた。本葬儀は8月25日にカリフォルニア州・慈光寺にて厳修さた。謹んで真位を増崇し奉ります。

活動予定

2002年11月～2003年3月

宗典講読会

会場：　桑港寺
　　1691 Laguna Street San Francisco, CA 94115
講師：　奥村正博　曹洞宗国際センター所長
内容：　正法眼蔵仏性巻
日時：　2002年12月22日、2003年1月26日、
　　2月9日、3月9日の各日曜日
　　午前　8時　00分　　坐禅
　　8時　40分　　朝課
　　9時　00分　　作務
　　9時　30分　　提唱

眼蔵会（正法眼蔵行持巻）

会場：　カリフォルニア州サンフランシスコ禅センター
講師：　奥村正博　曹洞宗国際センター所長
日時：　2003年2月14日（金）～21日（金）

曹洞禅連絡会議

会場：　サンフランシスコ桑港寺
日時：　2003年2月22日（土）・23日（日）